

昭和42年度

冬山合宿報告書

自 昭和42年12月25日

至 昭和42年12月31日

信州大学山岳会
長野山岳部

概要

I 目的 基本に分えり 琴瑟技術修得
特にラベルワーク、読図、ルートファイナイク 雪山
生活技術の養成

II 場所 戸穂山塊

III 方法 縦走 (八方眼より西岳アタック)

IV 期日 昭和42年12月25日～昭和42年12月31日

V 参加者

C.L 吉安尚夫 (教育学部3年)

S.L 市野史明 (教育学部3年)

向後利彦 (工学部土木4年)

青木郁生 (工学部土木2年)

VI 留守幹部

OB 関係 百瀬斐敏 (梓川高教諭)

山田和彦 (医学部一病理)

木下昭雄 (深志高教諭)

現役

西山泰代 (教育学部4年)

井原 亨 (工学部電気3年)

冬山合宿を終えて

吉岡尚夫

我々にもっとも欠けていたと思われた基礎技術養成を目的として計画された、今合宿も参加者4名という寂しい結果ではあったが、読図、ラッセルワーク、ルートファインディング等に多大な成果を得たと感ずる。

参加者が計画段階では9名だったが、これにもかわらぬ健康上、家庭の事情等で4名で行なわれたことは残念であると共に、部員の自覚が、いかに薄くものであるかをみせつけられた。

計画段階において不参加がわかりないうちに、計画を遂行しようとしないうちに、

それならば計画に同意するなと、いいたいし、同意したからにはもっと責任をもとと、いいたい。

之妻山北東尾根は、降雪の不足から3日目にして下山という、長く、厳しい尾根だった。積雪0.8~1mで湿雪、倒木の激しい、摩訶な井、之妻直下は尾根らしきものなし。しかも天候悪く、視界なし、全く計画が甘かった。無積雪期には通いさうもなく、スキーなどはけさうもなし。

今後は完全な計画をたてたい。この思いも寄らなかつた尾根の為、最終日のエッセシがなくなり、西野発電所には迷惑をかけたほった。笹ヶ峰まで行けば、逃げる山やない。上級生向けという毎朝さから生じたものがあり、大きな失敗があった。

ツェルトだけの一週間の山行は厳しい。幸い、接線では吹雪かれなかつたが、衣類をかわりかえることもできず、ヤレテントが欲しい。

入山予定者の不参加と共に、入山前のトレーニング不足が目立つ。
報告書作成に追いついていないが、A.B.Cは守らなければなら
ない。

北東尾根は動物が多く、うさぎなど見られる。

今後我々が山行するにおいては安全な計画と共に、部員の自覚を
期待し、自分の山行をして欲しい。

行動概要

12月25日 長野—中社—八方峠

12月26日 八方峠←→西岳

27日 八方峠—不動—五地蔵岳

28日 五地蔵岳—高垂山—乙書山—乙書山直下

29日 乙書山直下—氷沢

30日 氷沢—西野炭電前

31日 西野炭電前—杉野沢—田口—長野

行動記録

12月25日 晴

長野発(6:55) ^{バス} スキー場入口(8:10) — 赤門(9:05-9:30)

奥社(9:40) — (11:30-11:50)天狗のろじ — 胸突岩(2:00)

八方峠(2:30) 計 4ピッチ

全長 向後宅に泊り、安宿の通い炊事と見送りで4人でバス入
りもならぬぎやかなバスも4人目には寂しい。

奥社で入山届をし、天狗のろじでアゼンを上げ、胸突岩の下で
ギアを付ける。東正天のpartyによりラセルに2枚あるが

30kgの荷を背い、岩場の登りは厳しい。

天気は見えないが、遠く、南ア、富士がきれい。ハナ殿の小屋へ
夜は風が少し出る。 積雪 60~80cm

12月26日 晴。 2時頃お風少し出る。

出発(6:55) — 岩峰下(8:25~8:35) — 平院岳手前
peek(9:50~10:05) — 10:25 平院岳 — 西岳下クサリ場
(10:55~11:10) — (12:55)西岳 — クサリ場(1:25~1:40)
岩峰下(2:40~3:00) — ハナ殿(4:00)

トレースがなく、クサリの五界である。(深いところは腰までのラッセル)
岩峰を直接東越えようとすもラッセルで30分、夏道とありトラバース
する。西岳直下のクサリ場はアイゼンにはよかえ、クサリを掘り
起し、フックスする。向後のみ待機。3人で西岳アタック

天気は悪く、下から。トレーニング不足で、バテバテ。帰りは、自分の
意志によかに、Fで歩くのみ。 積雪 100cm

12月27日 ガス 時々晴

出発(6:40) — 2つ目の雪底付(7:30~7:40) — 戸隠山(8:
35~9:50) — 一不動(10:10~10:25) — ^{2ヒツ} 五地藏岳(12:25)
今日もまだトレースなし

天気がよいので、(今後の行動を考へ)予備食2日分をハナ殿に取る。
天気圏からは想像できない天気である。高度が低いためか、後立
山はさぞ吹雪ていさだろう。目前にある高妻山まで遠回
りの道をラッセル。一不動からは雪が湿ってきてクサリはつ
く。疲れの為か、全員気力なし。五地藏岳下に穴を掘
りツェルトをかぶる。稜線とこのは全く湿かい。

星がとともきかい日。

12月28日 ガス 片倉より風除く吹雪

(7:15)出発 $3\text{C} \rightarrow 7$ 高妻山 (10:05~215) — コル (11:30~150)

之妻山 (12:25~30) $2\text{C} \rightarrow 9$ 之妻山麓下 (2:10)

ツェルトビワであつたが、昨夜は晴か雨。今日もラセル 高妻山。まぐは元気ハツラツ。高妻麓下の切水と3は2C \rightarrow 4 平化フックス。高妻と之妻のコルは 広く、ナベの壺めようだ。スキー場にもなりそう。この頂より 荒天になり 之妻ピークは 逃けるようは 下降。北東尾根は 見えず。初め ニガロ沃原保川に 落ちている 尾根を 下り、途中より、カン木の 斜面を、トラバースし 北東尾根へ、この尾根は 之妻山のとこから 下りている しか わからぬ。少し戻つてから 下り始めると、この尾根は 続くと思われぬ。

今日はJP まぐと、予備食 1日分を 五地蔵寺に残してきた。

行動食 2日分と 予備食 1日分のみを もつてきた。

今日のランバは 地図上では 之妻山 へ 登下らしい。

「明日は かなしいだろう」 積雪 80~150cm

12月29日 雲から雪

8:00)出発 $2\text{C} \rightarrow 9$ J.P. (11:30~150) $3\text{C} \rightarrow 4$ 氷沢川 (3:00) —

ランバ (4:30)

行けども、行けども 初めの北東尾根は 続く、JPまで $2\text{C} \rightarrow 4$ 。

途中 うきぎを 再みぬる。うきぎが うらやましい。倒木の 向に 落ち

こみ、我を 止むのみ。うきぎは 上から 下へ

神道山の 手前で、倒木を 越えたと 思ふ、此が いやになり 氷沢川へ

倒木の 斜面を 下降。雪が 安定して あり、雪崩の 危険は ない。

下は 森林帯が 視界なし、佐渡山と 黒姫山を 見て、現在地を 知

るのみ、氷沢川沿いに左へ左へと行き、夏道に会う。
氷沢川を渡り黒姫山の腹をまいて笹ヶ峰へ行くが牧場
へぬけるか迷うが、遠回りではあるが夏道沿いに牧場へ
行くと決定する。全夏の疲労が激しく、又、時間的にも遅く
破壊地獄の小屋の屋根の下へもぐり込む。今日はうちと
げとわっくりする。せまの屋根の下でも、ツルトEが判り温かい。
ミユラフは全夏ビショヌレである。

12月30日 雪時曇

8:50 出発 ²¹⁰⁰ 清水沢発電所の上野 — 西野発電
所 (2=30)

今日は長野へと思っても、行けども行けども、発電所につ
かす。1km 200歩もラッセルするとバツク。視界は森林に
奪われ、やっと視界があらわれたと思うとまだ清水沢発電
所。そこから2ピッチ、ようやく発電所(ダム)の下を通り
発電所の中(西野発電所)で休憩させ頂す。まだ
4時間の距離とゆき(杉野沢まで)今夜はここで泊め
もらうことになる。

予備食とガソリンを昨夜のテントに置いてきた事をくやむ。

12月31日 快晴

出発(7:45) ²¹⁰⁰ (10:00 ~ 10:15) 三平木 — スター場
(10:50) — 杉野沢 11:25 ¹⁸⁰⁰ 長野 (12:40)

昨日とはうってかわって好天に、笹ヶ峰を一路長野へ、
発電所に御礼を言い、2日前から「長野へ」明日は
の長介を今日は僕らが早Eせよう。一月も山に入って

いEおらな島命である。
 スキー場おトトラックにのせてもらい、杉野沢へ
 スキー場のサハ子はおいもきいたなあ。

essen

	朝	昼	晩
25日		SNACパン 揚げ	ミソ汁、マトン
26日	モウ	パン、チリポトリ	ミソ汁、ハンバーグ
27日	モウ	パン、チリポトリ	ミソ汁、ヤキチン
28日	マカロニ	パン、揚げ	ミソ汁、マトン
29日	マカロニ	パン、揚げ	ミソ汁
30日	水とん	パン	ミソ汁、カレー
31日	ミソ汁、カレー		

装備

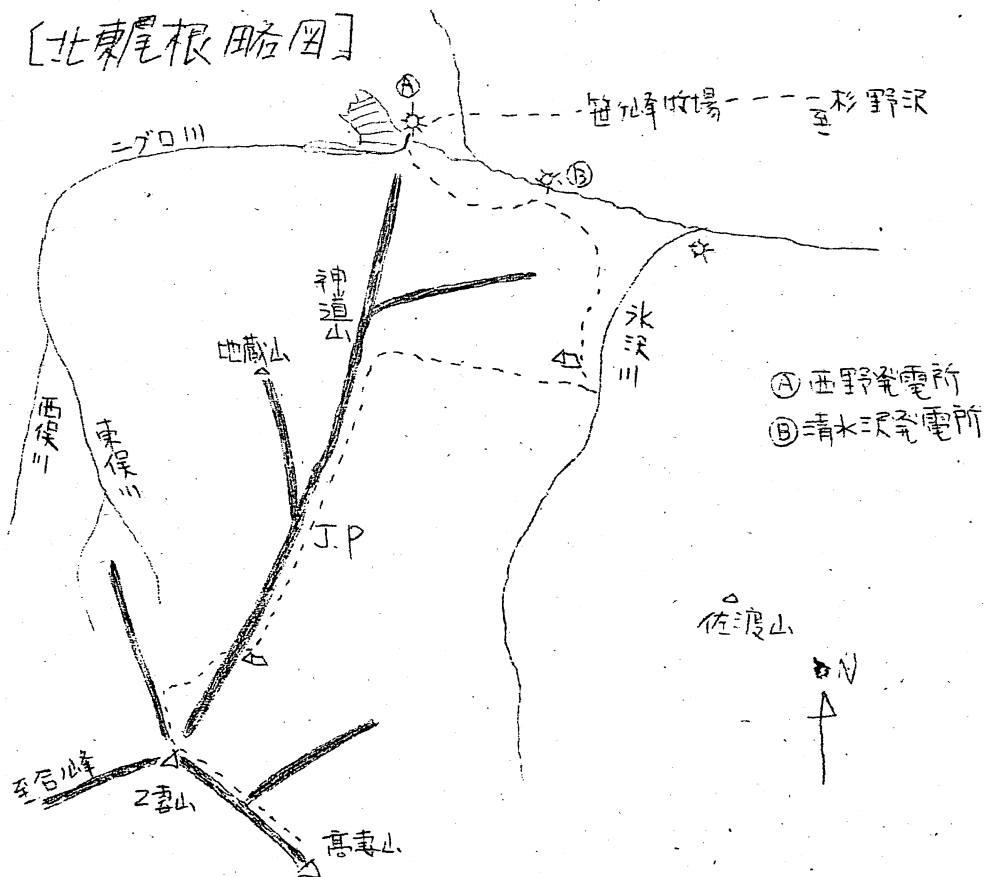
ガソリン	8L (使用5L)	スタッド	6平
オイル	(チロニ 40ml、チロニ 40ml)	マッセル	一組
トニカ	2	ヴェルト	23張
ビナ	4	グラブシート	1
ハーゲン	6	ラジエ	1
フェブス	1	シャベル	1

計画変更と入山日の遅れについて

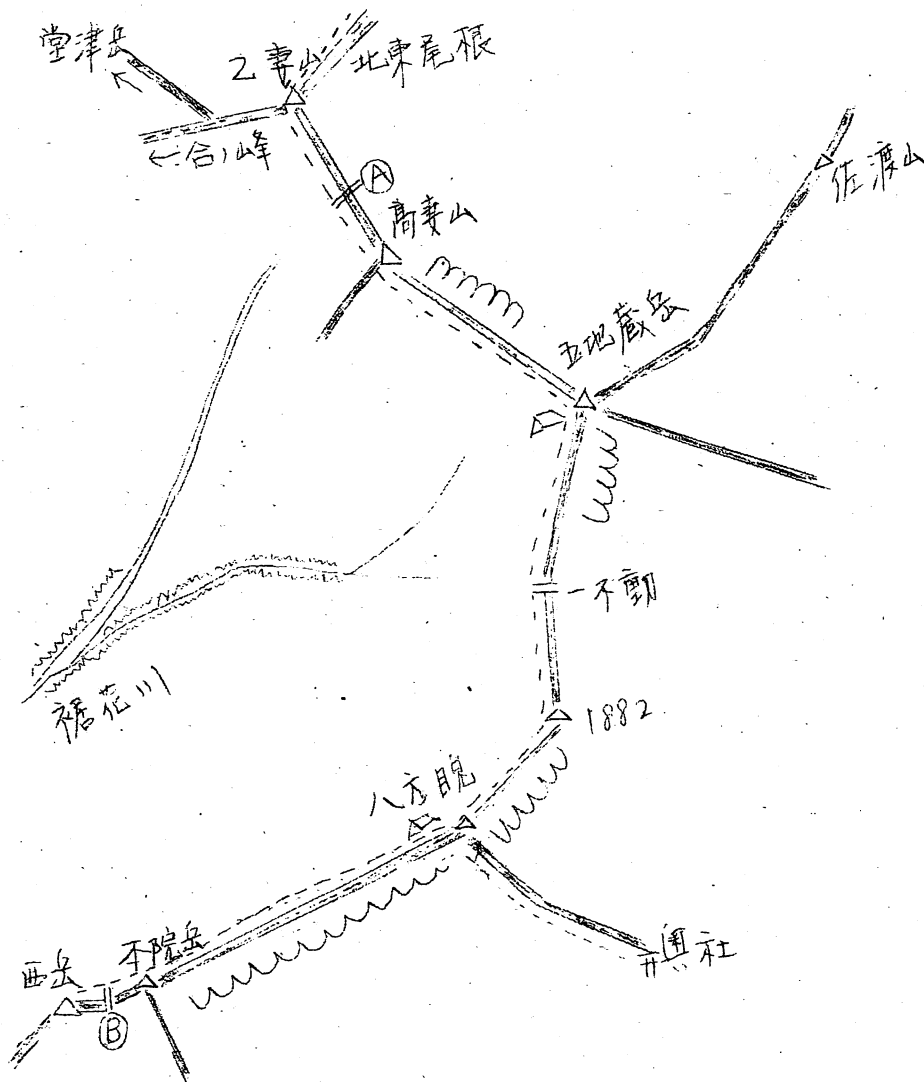
計画段階においては入山者が9名だったが、12月18日に入山者が4名となり、4名では2妻山北東尾根を登ることは日数的にも無理と判断し、ハネ尾より入山し、逆縦登することに変更した。あくまでも北東尾根をトースする為である。

入山日が24日から25日に延期したのは、冬山前までに遭難報告書の編集を済ませることとしていたが、予定が遅れ、24日昼に印刷所に送ることができなくなったためである。

〔北東尾根略図〕



[戸隠山塊略図]



Ⓐ 高妻直下, ガイルマイクス 2 pick

Ⓑ 西岳キレット ガイルマイクス 3 pick

感想

合宿を省みて

青木郁生

四人という小人数のためか、毎日山とは、山岳部とは、女とは、色々、様々な事を話し、商った。従来合宿とは少々毛色の変った合宿をできた事を喜んでおります。

行動面 精神面において今少し自分を打ちたたくと思えども中途半端な結果に終わってしまった。

今回の合宿を通じて得られた経験知識を踏台としてさらに精進に努め、次回登山行に對する情熱を高揚させておきたいと思っております。

感づいてゐることなど

市野ま明

どうしてこうなるか、山が僕のキミと云ふ比重を承めようか、と考へることは、何も、今から始まることではない。高校時代のいつの頃からか、常に山と何かを比べてきた。今もなるとも、テンピンの傾きは、決定的なものとは、なるとは思はないが……。

秋山以来、あまりに忙し過ぎて、とうとう、ごもせや山に登るための忙しさを思ひ、自分を打たす合宿を流して置くものである。私に何度通つたものだろうか、何度か、部会、リーグ会を商ひたことだろうか。仲間

一人を殺しては、以後でも、相も変らず、山をさまよい
歩き、いゝめい。

でも、秋山は来月の3ヶ月、本当に自分たちの山登りを正しく
思ふべきである。と、疑問に感ずる。このか、
よくある。遭難の反省に、私共らは、できる限りのこと
をいそぎ、(このことも多少疑問があるが)その
反面、5人もの仲間が部から去っていった。また、
その他にも、部活動に迷ってつづける仲間もい
るはずだ。この冬山はそんな仲間を下界に残し、
4人で入山した。この4人のかげには、何人の仲間の
援助があったか、計りしれない。

私達、大雪山岳部は、来月を不ぞろいにする。いけな
い。新しいもの、皮、衣、履をそろえる、そのおべつか、一体
たいてい、好む。一つの有機体は、全部に、組織がまわれ
よう。しかし、秋山(それ以前から)私達の
部活動に表れ、それは、自らの手で、殺すはら
い、皮をばさ、自分自身で、病めつけ、さすのかをい
ない。

一人一人の山登りを目ざす仲間が、有機体は、集まり、
一つの団体を組織する。しかし、一人一人の人間には
なく、目標が、いけな、い、又、その団体にも、
一つの方向と、移るべきは、ない。各人の山登

4ヶ山支部の目標もが果る。一俵化するものは、いつの時期なのだろうか。

リーダー会 冬山合宿反省

入山前

。入山予定者が合宿直前に多数急致合宿不参加という事態におちいった。その原因は部員全員に今回の冬山合宿をもつ意義というものが浸透しておらず、リーダー級部員のかまわりが多少なりとも影響しているのではなか。また遭難報告書作成、冬山合宿と大きな仕事を両立させたいなかにおいて部をまとめて全員を先導しようという意図したことは「甘さ」即ち部員の気持を把握できなかったことに大きな原因があるのでなか。

。2雪山北東尾根に因して資料不足、偵察の不徹底。時間的・金銭的束縛が大きな原因であるけれども未知のルートを計画した場合に色々様々な束縛があれども充分な偵察行い入山するまでであろう。資料不足、偵察の不徹底、これは大きな遭難に結びつく可能性が大である。以後計画立案の場合このことを充分に考慮の事が必要である。今回の場合戸隠というものを安易に考えていたのではなか、どんな山でも三夫してあるとらてはならなか。

。不参加者の援助不足

特定の人を除いて援助は皆無という過言では

なかつたと思う。このことは計画段階におき、部会に
計ったことである。どういふ約束事が実行されるかに約束は
けに終ってしまう。よに現在の山岳部の大きな問題は
あるのではないかと、部員各自に一考を要する。

入山中

。八方殿の小屋を使用した。火災 損傷も考えた
時 疑問が残るも ツェルト使用という ことを考
小屋使用にする。

。未知の沢下降。 檜木に非常に悩まされ 枝尾末
さ下ることになる。途中から沢に入らざるを得なくなり
しかも沢には滝があった。雪崩が起っても不思議
ではない斜面である。登山の基礎を考へない 軽率な
行動であった。これは事故に ぬいては 遭難に陥り
ておろす。 トレス予定ルートを簡単に代えるのは 非常
に疑内である。

。食糧を途中で棄てる

下山日に予備の食糧を棄てるも、歩いて 発電所へ
到着せず 発電所へ着いたのは 14:30 であった。

予備食は 17:30 下山、できることかかきまで

持ったものである。又 ピンチフードを 長野へ行ける

日という ことを 食べこしたのが 杉野沢へつ

いたのは 翌々日であった。ピンチフードは 断じて

インバフードとして けいけい ない。特に雪山においては

人々の荷物

必要最低限度のものを背って歩くものであるから、と
一歩が欠けても大難に致ると考えられる。充分注意し
て与らなければならない荷物を運ぶべきである。

総括

多々の問題を残せども、全行程を歩き、無事下山
できたことを慶びとした。北アのような華しい
登山も結構であるが、一歩極める少数の人
達しか歩かない戸隠という静かな雪深い山塊
に抱かれ、静かに山を考へ、語り寝食し、
景観を望むのも、非常に味のある登山であ
る。

今、合宿の目的である、ラッセルワーク、ルネサンス
リング、読図、生活技術等においては、少々の問題
は残れども、多々の価値があった合宿と思わねば。

春は何人山行合宿として行なわねば、

多々に期待します。ファイトあるのみ！！

1968. 1. 19.